むすんで、うみだす。

ISSN 0287-976X

Lib.

京都産業大学図書館報

Vol. 43, 増刊号
(Dec. 21, 2016)

第12回
京都産業大学図書館書評大賞

入賞作品掲載号

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品および講評	
＜大　賞＞	4-5
＜優秀賞＞	6-11
＜佳　作＞	12-21
アンケート	22
統計	23
概要	24

表紙：峰　ちさと（法学部 3年次生）

入賞者発表

第 12 回京都産業大学図書館書評大賞には 84 篇の応募があり，図書館書評大賞選考委員会で選考した結果，次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の 50 音順

大　賞

氏　名	所　属 年　次	書評タイトル 『書評対象図書』（著者名等）
秋田（あきた）　真里（まり）	外国語学部 英米語学科 ４年次生	季節に込められた感情 『春の雪』（三島由紀夫著）

優秀賞

木田（きだ）　香凜（かりん）	文化学部 国際文化学科 ２年次生	シュールな探偵小説 『名探偵の掟』（東野圭吾著）
鈴木（すずき）　健太郎（けんたろう）	法学部 法政策学科 ３年次生	人間失格 『人間失格』（太宰治著）
正木（まさき）　貴之（たかゆき）	文化学部 国際文化学科 ２年次生	小松左京の全てがここに 『さよならジュピター』（小松左京著）

佳　作

岡（おか）　楓真（ふうま）	外国語学部 ﾖｰﾛｯﾊﾟ言語学科 ２年次生	ロシア闇の戦争 『ロシア闇の戦争：プーチンと秘密警察の恐るべきテロ工作を暴く』（アレクサンドル・リトヴィネンコ，ユーリー・フェリシチンスキー著；中澤孝之監訳）
下條（げじょう）　真太郎（しんたろう）	経営学部 経営学科 ３年次生	『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』を読んで 『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』（中村尚樹著）
新屋（しんや）　怜央（れお）	経営学部 ｿｰｼｬﾙ･ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学科 ２年次生	ゆたかな社会 『ゆたかな社会』（ガルブレイス著 ； 鈴木哲太郎訳）
筒井（つつい）　茉衣（まい）	文化学部 国際文化学科 ３年次生	萬斎でござる 『萬斎でござる』（野村萬斎著）
西川（にしかわ）　七海（ななみ）	外国語学部 ﾖｰﾛｯﾊﾟ言語学科 ２年次生	幸福な食卓からみる、家族の形 『幸福な食卓』（瀬尾まいこ著）

選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会
図書館長　井尻　香代子

今年のノーベル文学賞は，いよいよ村上春樹が受賞するのではと胸を弾ませていたハルキストも多かったのではないだろうか。実は，本学図書館も，受賞が決まったら間髪を入れず特別展示をしようと企画していた。しかし，世界を驚かせた受賞者は，アメリカのシンガーソングライター，ボブ・ディランだった。スウェーデン・アカデミーによれば「口語で表現する偉大なる詩人」の初期の代表曲の一つ「風に吹かれて」の３番を紹介しよう。

幾年月　山は存在しつづけるのか
海に洗いながされてしまうまえに？
幾年月　ある種のひとびとは存在しつづけるのか
自由をゆるされるまでに？

何度ひとは顔をそむけ
見ないふりをしつづけられるのか？
そのこたえは、友だちよ、風に舞っている
こたえは風に舞っている

（ボブ・ディラン著；片桐ユズル，中山容訳『ボブ・ディラン全詩302篇』晶文社，1993年に収録(931||DYL２階)）

1963年のセカンドアルバム曲なので，すでに半世紀が経過しているが，少しも古びることなく現代を生きる私たちの共感を呼ぶ。質の高い文学は時代を超えて，多様な解釈を許すが，ボブ・ディランの詩もまた，聞く人それぞれの心に，異なった問いを投げかけ続けている。

書評大賞受賞の外国語学部４年秋田さんは，三島由紀夫著『春の雪』に描き出された，季節と感情の共鳴に着目し，日本文学の本質に触れる叙情性を，詩的な文章で解き明かしている。優秀賞は文化学部２年木田さんの東野圭吾著『名探偵の掟』，法学部３年鈴木さんの太宰治著『人間失格』，文化学部２年正木さんの小松左京著『さよならジュピター』を対象とした書評が選ばれたが，それぞれ「メタフィクション小説」「共感」「想像力」を切り口に，作品を自分の世界観に重ね合わせ，鮮やかな批評を展開した。また，佳作受賞の方々は，国際関係，家族，人権，職業など，現代社会の提起する問題に対して，安易な判断を下さず，丁寧に思考する力を見せていただいた。時は流れ社会は変わっても，私たちはどうしようもない状況に苦しみ，答えを探す。そうした誠実な問いと，答えへの歩みを入賞作品に見ることができ，学生の皆さんの底力を感じることができた。

今年度書評大賞募集にあわせて，７月27日（水）に直木賞作家で日本ペンクラブ会長の浅田次郎氏をお迎えし，「読むこと　書くこと　生きること」をテーマとして講演会を開催した。浅田氏は「一流の芸術というのは大衆的であり，芸術というのは最大の娯楽である」「スマホを触る時間を減らしてできるだけ１日４時間の読書タイムを持ちましょう！　何もなかった時代の人と同じような時間の使い方ができるかどうかでその人の人生が変わると思う」と熱く，またユーモアを交えて語られ，ご講演後の質疑応答は次々と会場から手が上がり，盛会のうちに終了した。

本番の書評大賞は７月１日から９月５日まで募集され，応募数は84篇(84名)だったが，応募要件外のものを除いて，78篇が第１次選考の対象となった。第１次選考は書評大賞選考委員会の委員(教員と事務職員)が２名１組計５組であたり，それぞれ３段階で評価した。その結果，25篇が第２次選考に残った。第２次選考は11名の書評大賞選考委員が日本語の体裁，内容の要約，批評する力を基準に審査し，大賞１名，優秀賞３名，佳作５名を選んだ。真摯な思考と確実な筆力によって展開された批評が２度の選考を通過し，委員全員一致で入賞作９篇が選出された。今年の入賞は，経営学部，法学部，外国語学部，文化学部の４学部の学生からの応募作となった。これらの学部，学年の皆さん方の達成を喜ぶと同時に，理系学部からも多数の応募者を来年の書評大賞には期待したい。

最後になったが，お忙しい中選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方，図書館職員の方々，そして，ご協賛いただいた京都産業大学同窓会，丸善雄松堂株式会社，株式会社紀伊國屋書店の皆様にあらためて厚くお礼を申し上げたい。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

大　賞

外国語学部　4 年次生

秋田（あきた） 真里（まり）

書 名 ： 『春の雪』

著 者 ： 三島由紀夫

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2002

「 季節に込められた感情 」

大人になるにつれ，季節の移り変わりに関して鈍感になってしまった。子どもの頃は学校行事や，年の節目で季節の移り変わりを感じ，楽しんでいたはずなのに。今ではカレンダーを捲る時に「ああ，もう夏も終わりか」などと四季の終わりに気付く程度だ。

本書について，私はまずこの作品を原作にした舞台で知った。舞台を観た時，ストーリーの流れや台詞の美しさに感動したが，何より私の興味を引いたのは，桜や紅葉や雪など，季節の移り変わりが丁寧に表されていたことである。演出家が四季を大切にして演出したのが分かったと同時に，作者である三島由紀夫はどのように季節を綴ったのかが気になり，本書を手にとった。

『春の雪』は三島由紀夫が最後に書いた長編小説『豊饒の海』の第一巻である。『豊饒の海』は全四巻から成り，古典作品『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語となっている。各巻の主人公は若くして死に，次の巻に輪廻転生していくという流れで，『春の雪』はその始まりの物語といえる。この『春の雪』は大正時代，華族社会に身を置く松枝清顕と，幼い頃に彼が預けられた伯爵家の令嬢である，綾倉聡子の悲恋を描いている。聡子は清顕より２歳年上で，姉弟のように育ち，お互い相手のことを意識してはいるが，18歳となった清顕は，聡子の言葉の端々に自分を子供扱いしていると感じ，突き放す。ところが聡子がこうした清顕の態度に対して失望し，宮家との縁談を受け入れると，清顕の聡子に対する想いが俄かに高まってくる。清顕は既に皇族の婚約者となった聡子と逢瀬を重ね，二人の恋は許されない禁断の恋となってしまう。

清顕の聡子に対する心情は，読んでいて非常にもどかしい。清顕の自尊心が恋情を邪魔し，清顕自身の感情表現が時に不十分，時に過激故に二人の関係は揺れる。しかし，相手を意識しているからこそ，相手が自分に発した言葉について，あれこれと考えてしまうのは理解できる。清顕の場合，聡子は姉のような存在でもあったから，姉的対象から，一人の女性として意識することへの戸惑いや反発が，清顕の気持ちから感じられる。

このような清顕を始めとする登場人物のもどかしい心情をより一層深めているのが，四季の描写である。物語は秋から始まり，翌年の冬の終わりに幕を閉じる。その季節の情景とともに，二人の関係は変化していく。最初の秋には紅葉色づく庭で，聡子の言葉に清顕は不安と戸惑いを感じ，冬には雪の降る朝に二人は口づけを交わし，春には桜の樹の下で清顕は聡子に拒絶され，夏には夜の海で二人は愛し合い，二度目の秋には葉が落ちるよう

に二人の恋に絶望の陰りが見え，二度目の冬には清顕は聡子に会うべく，熱に浮かされながら何度も聡子の元を訪れる。この情景描写と登場人物たちの心情がうまく混ざり合い，頭の中では四季の風景がありありと描き出されると同時に，それぞれが抱く感情が胸に迫ってくる。

私が特に美しいと感じたのは冬の描写である。冬は作中で二度訪れるが，一度目は聡子が清顕を雪見に誘い，二人で俥（くるま）に乗る。そこで二人は口づけを交わすが，雪の冷たさ，冬の寒さの描写が，口づけによる清顕の心の高揚や，二人が触れ合う体温の温かさを引き立てている。二度目はもう冬も終わろうとしている頃，今度は清顕一人が聡子に会うために俥に乗っている。病気を患いながら聡子の元へ向かう清顕は，幌の隙間から入り込んできた雪を見て，二人で俥に乗り雪見をしたことを思い出す。雪見の時の冬の寒さは，二人が触れ合う温かさの対比となったが，この時冬は孤独な清顕に体感的な寒さと，精神的な冷たさを向けている。ただこの「冷たさ」が，「聡子は僕に会ってくれるかもしれない」という清顕の希望を際立たせている。これら二つのエピソードは，冬の寒さと清顕の心情が特に感じられ，また二度目の冬の描写は，一度目の冬の雪見の描写により一層切なく感じられた。三島由紀夫は四季に感情を乗せて綴ったのだと，読み終えた私は思った。

四季によって，また年によって，気持ちは変化する。私の場合，例えば春は新たな始まりに対する期待や，暖かい気候に心は高揚するし，秋は葉が落ちるごとに気温も下がり，どことなく侘しさを感じる。季節の移り変わりに鈍感になってしまったと思っていたが，気候や情景の変化と，自身の気持ちが結びついていたことに気付いていなかっただけで，どうやら感情は四季を感じ，日々変化していたようだ。満開の桜を眺めるうららかな春に，燦々と太陽の照る爽やかな夏に，木も地面も紅葉で色づくのどかな秋に，しんしんと雪が降る静かな冬に，この作品を読んでみて欲しい。読んだ季節によってそれぞれ違った印象を抱くことだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法務研究科教員　渡邉　泰彦**

三島由紀夫の作品に取り組むというのは，なかなかできることではない。どうしても，あの荘厳で濃密な（あるいはバタ臭い）世界に圧倒されてしまう。この書評は，自らが舞台で見た印象をもとに，季節感を中心に据えて作品に切り込み，紹介している。また，季節をテーマにまとまりがあるだけではなく，文章も非常に読み易く，テンポよく一気に読ませる。他方で，舞台という仲介を挟まれていることで，評者と三島作品の間に一定の距離感が与えられている。それにより，どこか屈折した人間像をもつ登場人物が織り成す本書の濃密な世界に囚われずにすんでいる。その意味でこの書評は変化球であるが，文章の良さが直球のような印象を与える。

舞台の演出家の視点から出発したとしても，舞台を見た感動から原作を手に取り，その世界をもう一度自分で確かめようとする思いがこの書評からは伝わって来る。最後に大きくまとめてしまおうとするのは，若さゆえであろう。この書評に誘われて，私も本書を初めて読んでみた。やはり，三島は三島であった。それとともに，三島作品の濃密さではなく美意識を足取り軽く表現するこの書評を改めて評価した。

入賞者から一言

この度はご選出いただき，誠にありがとうございます。

大学生活最後の記念として応募した本評が，まさか大賞をいただけるとは，嬉しさと同時に非常に驚いています。

今回ひとつのキーワードとした「季節の移り変わり」は，自然豊かな京都産業大学に４年間通っていたからこそ，より感じることができたのだと思います。図書館前の桜，紅葉は非常に美しいです。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　２年次生

木田（きだ） 香凜（かりん）

書 名 ： 『名探偵の掟』

著 者 ： 東野圭吾

出版社・出版年 ： 講談社 ， 1999

「 シュールな探偵小説 」

本書のタイトル『名探偵の掟』を目にした読者は，「主人公である名探偵が，己の中の何者にも侵すことのできない“信念”に従ってかっこよく事件を解決していく物語」と推測するのではないだろうか。残念ながらその憶測がまったくのハズレであることは物語のプロローグを読んだ時点で分かってしまう。この作品では，探偵小説で欠かせない刑事が「推理小説の創作の掟」を意識して「ぼんくら刑事」の役柄を演じ，一見，風采の上がらない探偵が「推理小説の創作の掟」どおりに事件を解決するように事を運んでいく。推理小説では，読者は様々な語り手の語りに基づいて推理を行っていく。その意味で語り手はもっとも重要な役割を果たすはずなのだがこの作品では，ぼんくらぶりを発揮する刑事が語り手となり，物語世界であることを意識しながら物語を展開するメタフィクション構造になっているのだ。

この物語の主な登場人物は二人いる。まず一人目が，とんちんかんな推理を振り回し，的外れな捜査を繰り返す刑事の大河原番三である。そしてもう一人が，探偵小説において絶対に外すことができない，頭脳明晰，博学多才，行動力抜群の名探偵・天下一大五郎である。以上，主な登場人物はこの二人だけである。優秀な助手やなんでも発明してくれる天才博士や子供の探偵団，ましてや猫などは一切出てこない。本書では，12の難事件が短編として構成されているのだが，そのほとんどがぼんくら刑事の大河原によって語られる。唯一しっかりしていそうな名探偵の天下一ではなく！

世の中には推理小説がたくさんあふれているが，脇役であり「推理小説の創作の掟」に従って事件を迷宮入りに持ち込むためだけにいるような，大河原のごとき，ぼんくら刑事が語り手となっている推理小説は見かけない。語り手として全く信用できないではないか。しかも作品では，密室殺人，ダイイングメッセージ，童謡殺人など，いわゆる推理小説ではおきまりのトリックがこれでもかというほど使われている。しかし，信用できない語り手，おきまりのトリックであっても問題ないのである。実は，この作品の極意は，メタフィクション小説という斬新かつ独創的なスタイルで，本格推理小説とは何であるかを，登

優秀賞

場人物を通して読者に問うところにある。作家は，登場人物に物語世界であることを意識させる一方で，登場人物としての役割をしっかり理解させている。この形式を通して作家は，物語進行に差し支えの無いようにしながら本音を読者に伝えることが出来るのだ。

この小説のもう一つのミソは，物語世界から抜け出した時の探偵と刑事の会話にある。突如その物語での自分の役を捨てた二人が，物語の舞台設定や，読者をミスリードさせるためのキャラの魅力，物語構成，さらには作家についての批判まで話し始めるのである。またその軽快なやり取りが，独特の雰囲気を作り出す。なぞ多いダイイングメッセージや難解な密室殺人，ゾッとするようなバラバラ死体事件など本格推理オタクにとっては大興奮物のトリック要素が詰め込まれているのだが，二人のコミカルなやり取りのせいでまず緊張感がなく，読者は推理にまったく集中できないのである。それでは，推理小説本来の面白さがないかといえば，そうではなく，物語の落ちとトリックの正体は誰にでも予想がつくような簡単なものではない。たとえ二人のコミカルなやり取りで推理が邪魔されたとしても，読者が重要な伏線や事件解決のカギを見出せるしかけになっており，さすが人気ミステリー作家の作品だと思わせる。

ミステリー小説の楽しみをそいではいけないので，あえて本編の内容には詳しく触れないでおく。名探偵による画期的なトリックの種明かしと論理的な説明という息詰まる展開を求めている読者には物足りなく思われるかもしれない。しかし一度読めば，一見，お決まりのパターンに満ち溢れているかに思えるこの作品のシュールさに惹きつけられるだろう。難解で恐ろしい事件の裏で行われる痛快な二人のやり取りに込められた作家の本格推理小説への熱い問いかけが，ひしひしと伝わってくるはずである。

選考委員による講評　　**選考委員代表　総合生命科学部教員　竹内 実**

本書の『名探偵の掟』は，推理作家である東野圭吾の著書で，彼の本格推理小説の代表作とも言える作品である。推理小説では，作者と読者の間で約束事が存在する。この作品では，ぼんくらな刑事で的外れな捜査をする大河原番三，そして頭脳明晰で行動力のある名探偵・天下一大五郎の二人が主な登場人物である。また，この作品のなかの密室殺人，ダイイングメッセージ，童謡殺人などでそれぞれの役割は，暗黙のうちに定められている。本書は，推理小説の約束事を逆手に取った作品で，作者の推理に対する熱意と理解が読者に伝わる作品である。

この書評では，小説の内容が読者にある程度推測できるように登場人物である刑事と探偵像について，その概要が良くまとめられている。また，刑事と探偵の推理のやりとりなどがこの書評を読むことで，その情景が思い伺える点も評価に値すると判断した。今後は，文章表現などに工夫を加えさらに良い書評を期待したい。

入賞者から一言

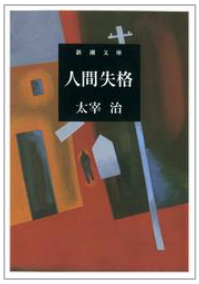
優秀賞を頂くことができたことを大変光栄に思います。書評を書くということで，いつもよりじっくりと本を読み解きました。好きに感想を書くのではなく，批判，評価を交えて文章にするということはとても難しく骨が折れました。次回も挑戦出来たら良いなと思います。この度は本当にありがとうございました。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

法学部　３年次生

鈴木（すずき） 健太郎（けんたろう）



書 名 ： 『人間失格』

著 者 ： 太宰治

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2006

「 人間失格 」

「恥の多い生涯を送って来ました」この有名な言葉で物語が始まる『人間失格』は作者である太宰治の人生を投影した本である。太宰は青森育ちで裕福な家庭に生まれた。頭も容姿も優れている彼の独特な人生観が主人公である葉蔵を通して，大きな衝撃と魅力を読者に与えてくれる作品になっている。この本を読んだ後，しばらく私はショックで動けなかった。『人間失格』が与える軽度の鬱とやる気のなさが私を襲った。それは主人公の葉蔵がどうしても自分と重なってしまい，共感してしまうからである。

葉蔵には人の営みが理解できなかった。人が何に対して喜び，悲しむのか，また例えば腹が減るとは一体どのような感覚なのか。なぜ一種の宗教のように毎日家族と顔を向き合ってご飯を食べなければいけないのか。世の中の人が普通にしていることが理解できない葉蔵には，人というものが自分とは別の生き物に思えて怖かった。しかし他人と上手く協調していきたい気持ちは切れないものでもあった。そこで自分を取り繕う道化の道を選んだのである。

『人間失格』は大きく分けて「幼少期」，「青年時代」，「廃人になるまで」の生活の三つに分けられている。基本的に三篇とも主人公視点で物語が描かれている。幼少期は，葉蔵が道化を覚えるまでの過程や成功を描いているものであり，太宰の人生に対する考え方が詰まっている部分でもある。青年時代はクラスメートの竹一に自分の道化を見破られた事から始まる。葉蔵は道化を見破られたことに対する恐怖心を常に感じながら生きていた。その恐れを一時でも忘れるために，葉蔵の友達である堀木と遊びに明け暮れる生活を描いている。そして廃人になるまでの期間は人間を理解できず，それ故人間を信頼できなかった葉蔵が，ヨシ子という女性に会うことで束の間だけ人間に希望を持てた時期とその希望が崩れ落ちて葉蔵が廃人になるまでの物語である。

読み進めていく内に，主人公の葉蔵が自分と重なる人と，葉蔵に全く共感できない人に分かれる作品ではないかと思う。この共感できるかどうかで『人間失格』に対する評価も全く変わってくる。しかし共感できない人が悪いという意味ではなく，きっと太宰が感じ

たような悩みに苦しむ人生とは無縁なのであろう。太宰の悩みは周りから見れば必ずしも理解できるものではないと思われる。寧ろ彼の悩みは甘えのようなものに思われ，好かない人も多々いる筈だ。

しかし一方で葉蔵に共感する人が多いのも事実であろう。それは葉蔵が誰よりも人間らしいからである。彼の感じている苦悩は普遍的なことである。彼が誰よりも純粋であるからこそ，人間が普段している当たり前の事にさえ傷ついてしまう。そんな自分を許せず，人間失格の烙印を自分に押し付けて生きている。一見息苦しく見えるこの小説であるが，この悩みで感じた葉蔵の感情に，人々は自分と重ねることができる。それは深く私たちに人生の意味を問う内容になっている。だからこそ日本文学の代表として，沢山の人に読まれ続けている所以ではないかと思う。私も葉蔵の共感者である。葉蔵は物心ついた時から道化として自分を守り通してきた。そこがとても心に残る。私は小さい時から友人の中心でいることが何よりも幸福であった。得意であったスポーツや音楽の場面で周りから期待されることや，祝福される存在である自分が好きであった。自分という存在を証明したい。友人の中心でいたい。このような心理から時には自分の意見を心に収め，周りの期待に応えてきた部分があった。そして認められることにより自分を肯定できていた。しかし同時に，その思いを見破られる恐怖を抱いて生きている自分もいた。葉蔵と私の思考は全く同じではないが，道化を演じることにより自分を守ろうと考えている点で私は葉蔵と同じである。人間であれば誰でも自分に嘘をつき道化になる場面は存在する。

この本はその当たり前の行為を私たちに理解させてくれる。同時に太宰の考え方を通して，如何に人間がその道化を正当化して生きているのか教えてくれる。ここまで人生の全てを赤裸々に語っている本は私の知る限り太宰治の『人間失格』しか知らない。人生について深く考えさせられるこの本は，時間のある大学生にとっておすすめの作品である。是非一度この本を読んでみて欲しい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　理学部教員　高谷　康太郎**

批評は難しい。書評は批評の一種だから，これも難しい。さらに書評への講評とはこれいかに。こちとら文学者でも読書家でもなく，一介の研究または教育労務者に過ぎない。こんな仕事は手に余る。ということで，他人のふんどしで相撲を取る事にする。

小林秀雄の有名なエッセイ『読書について』の中で，読書を通じて作家を「小暗い處で，顔は定かにわからぬが，手はしつかりと握つた」という具合に理解出来れば，「ほんの片言隻句にも，その作家の人間全部が感じられるといふ様になる」旨の記述がある。宇宙の真理だか人生の深層だか，とにかく物事を徹底的に考え抜いた作家の全人格を感じられるようになれば素晴らしい。太宰治は確かにくせのある作家だが，ゾウに向かってお前さんの鼻はどうも長過ぎるようだ（この表現も小林秀雄だ）みたいな事を言わず，一人でも多くの人が太宰作品（でなくとも良いのだが）を読み込み作家の手を握る事が出来るようになる事を祈って止まない。

入賞者から一言

大学生活も折り返し地点を過ぎた３年。

漠然と何か形に残るものを大学に残したいなと思い，書評に挑戦しました。拙い文章ですが，自分の好きな一冊でこのような賞を頂けたことを大変嬉しく思っています。ありがとうございます！

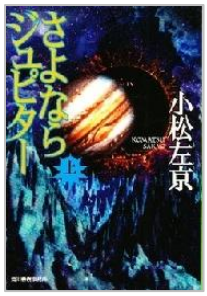
１つだけ欲を言えば，もっと早く書評大賞書けば良かった。書評楽しかった！

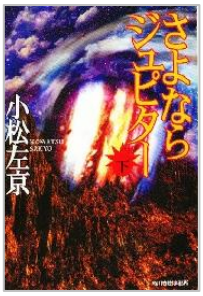
第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　２年次生

正木（まさき） 貴之（たかゆき）





書 名 ： 『さよならジュピター』

著 者 ： 小松左京

出版社・出版年 ： 角川春樹事務所 ， 1999

「 小松左京の全てがここに 」

SFを愛するものにとって，1970年代は至福の時であったに違いない。大阪で開催された日本万国博覧会の影響も受けて科学全般に対する世間の関心が高まり，SF作家たちの権威もあがりつつあったこの時代に，小松左京は満を持してSFの超大作『さよならジュピター』を発表した。

『さよならジュピター』は宇宙開発が進んだ22世紀が舞台となっており，「火星水資源開発」の際に火星の表面にナスカの地上絵に酷似した模様が発見されるところから物語は始まる。地球に溢れた人類はすでに他の惑星に進出を始めており，そのエネルギーを確保する方策として太陽のような恒星になり損ねた星である木星を開発する「木星太陽化計画」を進めていた。しかし，ブラックホールが太陽にまで到達することが発覚。「木星太陽化計画」は「木星爆破計画」に変更され，爆破の衝撃でブラックホールの軌道を変えるという人類史上最大のミッションとなった。このミッションの遂行がメインストーリーとなるが，物語ではそれと並行して，「爆破計画」の主任である主人公・本田英二と，計画を妨害しようとする過激派環境保護団体に所属する恋人のマリアの悲恋物語が展開される。さらに「ナスカの地上絵に酷似した模様」の謎解きの要素も加えられている。本作品はSF（サイエンス・フィクション）というだけでなく，SF（サイエンス・ファンタジー）としての側面でも十分に練られており，これらの複雑な構造が破綻することなく見事に統合された作品だといえる。『さよならジュピター』は一言で表現するなら「小松左京SFの集大成」である。この一作で彼を知ることができるといっても過言ではない。

この作品の特徴はまず「丁寧な情景描写」にある。SF小説では，そこで提示される現実離れした場面設定を頭に思い描く「想像力」が予想以上に必要となる。情景を思い浮かべるのがややきつく感じる作品も多々あるが，本作品では描写が詳細になされるため，そこがどのような空間なのか，何人いるのか，どんな機械があるのかなど，場面を容易にイメージしながら読み進めていくことができる。また情景だけに限らず，登場人物が持つ世界観などについても丁寧に提示される。例えば，宇宙基地にやってきた人々に，本田が「木星太陽化計画」について説明する場面では，読者もまた，彼の口を通して地球の現状やこの計画の重要性を理解することになる。小松左京の文章力も相まって，まるで読者もその

優秀賞

見学に参加しているような気になり，質問する登場人物と自分がオーバーラップするような錯覚に陥る。

また「群像劇」としての完成度が高いのも本作品の特徴である。小松作品ではスケールの大きい話が多いため，登場する人物の数もその他の小説に比べて多くなる。それにも関わらず，それぞれにスポットが当たるようになっており，「登場するだけ」，「名前だけ」といった通りすがりのような人物はほとんど見受けられない。特に木星爆破がメインになってくる下巻からは，一人一人が自分のすべきことを，自分がいる場所でベストを尽くそうとしている緊迫した様子が伝わり，どのキャラクターにも感情移入しやすい。果たして計画は成功するのか，本田とマリアはどうなってしまうのかという今後の展開を，興奮状態を保ったまま迎えることができるのだ。また主人公たちを巡る人々が丁寧に作り込まれていることにより，マリアたちが「木星太陽化計画」に反対し，抵抗していたことの理由にも納得できるようになっている。

小松左京は『さよならジュピター』が映画化されることを前提にして創作した。「宇宙戦艦ヤマト」，「スターウォーズ」といった映画が次々と発表された時代に，彼は海外SFに負けない作品を作りたいと考え，様々なSF作家，科学者たちと共に８年間構想して原作を完成させたのだ。しかし，その原作の多層的な構造のゆえに，映画化でカットされた場面が多く，作品の魅力は十分に表現されなかった。「2001年宇宙の旅」などと比較されたせいもあり，映画とともに原作も忘れ去られた作品となっている感がある。現在は「SFは映画で楽しむもの」「SF作品は海外にかなわない」とする傾向が強いように思える。しかし『日本沈没』をはじめ数々の名作を書き続けた小松左京が会心の作として世に送り出した『さよならジュピター』を今だからこそ手に取り，「活字で楽しむSFワールド」をぜひ楽しんでほしい。読み終わった後，映画では味わえない興奮や感動を必ず体験することができるだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　外国語学部教員　青木　正博**

『さよならジュピター』は，小松左京が1979年に映画のシナリオとして最初に書き，それをもとに1980年５月から1982年１月まで雑誌に連載した長編SF小説である。1984年に映画として公開された。小松左京はこの作品を通じて，「人類社会と宇宙」という問題について考えて見たかったと語っている。

評者はこの本をよく読みこんで，的確に特徴をとらえて批評している。そのさい，「この作品の特徴はまず“丁寧な情景描写”にある」，「また“群像劇”としての完成度が高いのも本作品の特徴である」というように段落の最初に段落の内容を簡潔に表したことばを入れているので，批評の内容が分かりやすくなっている。文章もよく練られていて，話の筋が通っており，書かれていることに説得力がある。また評者の小松左京に関する知識が豊富なこともこの書評を興味深いものにしている。評者の『さよならジュピター』への愛がひしひしと伝わってくる書評である。

入賞者から一言

SFというジャンルの本の書評が選ばれたことで，この作品がまた多くの人に知ってもらえるため，嬉しい限りです。今後も様々なジャンルの本で挑戦していきたいと思います。

最後に，アドバイスをしていただいた中西先生には感謝しています。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

外国語学部　２年次生

岡（おか）　楓真（ふうま）

書 名 ：『ロシア闇の戦争 ： プーチンと秘密警察の恐るべきテロ工作を暴く』

著 者 ： アレクサンドル・リトヴィネンコ，ユーリー・フェリシチンスキー著 ； 中澤孝之監訳

出版社・出版年 ： 光文社 ， 2007

「 ロシア闇の戦争 」

1991年ソビエト連邦が崩壊し，ロシア連邦が誕生した。そのとき，国内では何が起きていたのか。政府や関連機関がどのように暗躍していたのか。そして，元ロシア連邦保安庁(FSB)情報部員のアレクサンドル・リトヴィネンコはなぜ政権の内幕を告発し，殺害されたのか。本書はロシアという大国の闇を克明に描き出したルポルタージュである。あまりに真を突いているために禁書になったほどだ。ロシアの実態，国際社会の深層を知る上で欠かすことのできない貴重な一冊と言える。

著者のユーリー・フェリシチンスキーは本書の冒頭，2003年ロシアで出版するに当たり，ロシア政府から禁書処分を受けたと述べている。ロシアの国家機密を漏らす内容というのが理由だ。フェリシチンスキーとリトヴィネンコがどんな危険を冒して情報を収集し，本書をまとめるに至ったかがうかがえる。

なぜ禁書になったのか。ロシア政府は一体，何を隠したかったのか。

ソ連が崩壊して以来，ロシア国民は何より民主主義を望んだ。しかしFSBは民主主義など眼中になく，かつての強い共産主義国家の再生と継続を望んだ。民意を変えるには，敵を作る。それがFSBのやり方だった。

1999年９月，ロシア全土が震撼するモスクワのアパート爆破事件が起きた。当時FSB中佐だったウラジーミル・プーチンは一連の事件をチェチェン人のテロによるものだと発表した。だが，本書は全く違った見解を提示している。爆破事件はほかでもない，政権をバックにしたFSBの自作自演だというのである。ロシア国民を巻き込み，チェチェン共和国のせいにし，プーチンを大統領にするための謀略である，と。事実，エリツィン政権は事件後，FSB主導のもと，第２次チェチェン戦争を勃発させた。シナリオ通り，ロシア国民は一気にプーチンを支持し，大統領へと押し上げた。現在でもロシア政府は「チェチェン人がテロを起こしたことが原因で戦争は起きた」と主張する。

本書はさまざまな根拠を基に，真っ向からその主張を否定している。日本に住んでいてロシアの歴史を知らない人間には，「諜報活動」や「暗殺」といった言葉は遠い世界のことのように感じるだろう。しかし，本書を読んで，私はロシアという国がいかに愚かな行為をしてきたのか，気づかされた。各地の連続爆破事件で何百人もの人が死亡し，その後リ

ャザンでも「爆発物らしきものの入った砂糖袋」が発見された。リャザンの人々は避難し，眠れぬ夜も過ごした。しかし，当時FSB長官だったニコライ・パトルシェフは「演習だった」と弁明した。実際は砂糖ではなく，本物の爆薬だったという有力証言がのちに紹介された。もしかすると，リャザンでもモスクワのアパート爆破事件のようなことが起きていたかもしれないのだ。

本書が初めて出版されたのは実は，2002年のアメリカである。英語版だった。そのときは，あまりのリアルさゆえに信ぴょう性を疑う人も多かった。しかし，2006年にイギリスでリトヴィネンコが殺害されたことをきっかけに，世界から大きな注目が集まることになった。ロシアがリトヴィネンコを殺害しなければならない理由とは――。それはかつて，リトヴィネンコがモスクワで行った記者会見で，FSBから命じられた違法な暗殺任務を暴露したことだという。

ロシアには機密を国外に漏らして投獄され，拷問を受けたというケースは他にもある。では，なぜリトヴィネンコは国家の管理となっている放射性物質「ポロニウム210」を紅茶に盛られ，暗殺されなければならなかったのか。その理由こそが本書の核心であり，詳細に叙述されている。私たちは基本的に，当該国が発する公の情報しか知ることができない。たとえ国家の機関が動いてロシアという国を思い通りにしようと，陰でクーデターを起こしたとしても，内情はうかがいしれないものだ。

著者のフェリシチンスキーとリトヴィネンコとの間には深い絆がある。序文では，フェリシチンスキーがいかにリトヴィネンコを守り，亡命させるかの苦労が描かれ，彼らの人間性に感銘を受ける。そして終章で記された，病床でのリトヴィネンコの声明文。死を覚悟しながら，首謀者であるプーチンに対して発した最後のメッセージである。フェリシチンスキーやリトヴィネンコが命を懸けて，世界に警鐘を鳴らそうとしたのは「無関心こそが一番危険なのだ」という一点だった，と私は思う。

選考委員による講評　　**選考委員代表　総合生命科学部教員　竹内 実**

本書の『ロシア闇の戦争』は，「Blowing up Russia : the secret plot to bring back KGB terror」の全訳本である。原本はロシア語で書かれ，内容が国家機密の宣布に触れた出版物であったため，政権にとって触れたくない内容が含まれていることもありラトビアで印刷された。印刷された本を積んだトラックがモスクワに向かう途中，ロシア連邦保安庁（FSB）と国務省によって押収され発禁となった経緯がある書物である。最初の英語版は2002年にニューヨークで出版されたが，プーチン政権への配慮とあまりにも生々しい内容などの点から，信憑性に疑問を抱かれ，一般には広まらず狭い範囲での話題に留まっていた。しかし，著者のアレクサンドル・リトヴィネンコが亡命先のロンドンで毒殺されたため，その後に注目が集まった書物である。この書評では，ロシアで起こったアパート爆破事件について，反国家に触れた出版物であるため，日本では考えにくいロシア政府の対応が読み取れる点を評価した。

入賞者から一言

このたびは私の書評を，佳作として選んでいただいてありがとうございます。

まるで映画を観ているかのように，テンポよく進む本書を多くの人に読んでいただきたかったです。

そして，このような書評という形で完成させることが出来てよかったです。

また機会があれば挑戦したいです。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

経営学部　３年次生

下條（げじょう） 真太郎（しんたろう）

書 名 ： 『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』

著 者 ： 中村尚樹

出版社・出版年 ： 草思社 ， 2013

「『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』を読んで 」

本書は障害を抱えた人々の取材に基づき，彼らのおかれる現状も踏まえつつ，障害者の教育や人と人のコミュニケーションに新しい可能性を示唆するノンフィクションである。

本書を読み，私たちは「言葉」によって生きているのだと気がつかされた。人は文字，文章，声など，あらゆる方法で誰かに意思や感情を伝え，日常生活を送っている。意思疎通ができるということでお互いが生きているのだと認識している面も否定できないだろう。では，言葉を持たない人は。この疑問を抱いてしまったら，ぜひ，この本を読んでほしいと思う。もしかすると，人は「言葉」を失うなどということはありえないのかもしれない。言葉を失う，もしくは持っていないと思われる人も意思はかならず持っている。嫌なことは嫌だと感じるし，幸せは幸せと感じている。そして，こうした意思は言葉によって表現されるのである。伝えあう術を工夫し，発展させればより多くの人々が幸せになれるのではないか。本書は，そうした可能性を示してくれる一冊である。

本書に登場する研究者は長らく大学で「特別支援教育」について研究し，教鞭をとってきた。特別支援教育とは，障害を抱える児童生徒への教育のことである。重度の障害を抱える児童生徒が，学び，成長することができるよう適切な支援を行いながら，教育を提供することが特別支援教育である。この教育の対象となる障害を抱えた子どもたちの中には，重度重複障害と呼ばれ，複数の重い障害を抱えた子どもたちがいる。一例をあげれば生まれつき歩行が困難で，声帯が発達しておらず，会話をすることができないなどがあげられる。このように障害児は自らの意思を伝えることが困難な場合が多いのだ。

本書で最初に登場する女の子も，生後数か月で脳と体に機能不全を抱えていることが明らかになる。手術などを通じ，声を失い，だんだんと体は大きくなっていくものの，会話はままならず，何を考えているのか，何を求めているのかは親ですらわからなかった。それでも親や医師は懸命に彼女を支え続けた。しかし，「言葉を発しない」という事実は，親ですら「この子には何もわからない」すなわち「意思はないのでは」との思いを抱かせてしまう。時折その子どものいる病室で，子どもの将来への不安を口にしてしまう。

そうした中，研究者は，障害を持った人が円滑に意思疎通を図るために，ワープロとデ

ィスプレイを組み合わせたある装置を開発する。障害を持った人間は，重度重複であれ，まったくすべての体が使えないわけではない。当事者に残されたわずかな能力，たとえばかすかな声，動かせる視線やまぶた，首や手，指など自分で動かせる部分はすべて使って，どうにか意思疎通を図る。これはACC（拡大・代替コミュニケーション）と呼ばれるシステムである。海外では研究が進められているものの，日本では遅れている。研究者はこの装置の使い方を重度重複障害のさきほどの女の子に指導した。はじめは介添人が手をもって，ボタンなどの操作を行い，文字を入力する。この動作を繰り返し，女の子の自発的な操作を促す。そして，奇跡は起きた。本書におけるこの場面はあまりにもドラマチックである。意思がないと思われていた女の子が人生で初めて紡いだ言葉は何か。この言葉は，女の子の心の中で常に言葉が紡がれていたことを明らかにした。自分のために世話をし，時には不安を口にする家族の姿をみて，彼女は常に考えていたのである。

本書を読んだとき，あまりにもはっとさせられることが多かった。教職課程を通じて，私が実際に触れ合った重度重複障害を抱えた男の子も，言葉を発することができなかった。何か働きかけても反応はない。私はこのとき「ああ，わからないのかも」と思いながらお世話をしてしまった。しかし，どうやらこの認識は間違いだったのだと今では考えている。会話ができない，言葉を交わすことができないというだけで，何らかの意思は必ず持っている。こうした事実も，言葉を発しないというだけで忘れてしまいがちな自分に気づいてしまった。皆さんは，本書を読み終えてどう思われるだろうか。

最後に，本書は読む人にさまざまな「気づき」を与えてくれると思う。言葉の存在の大きさや，意思の存在，さらには自分自身の他人への見方に至るまで，私は多くのことに気づき，反省もした。本書を読み，自分なりの「気づき」を得てみてはいかがだろうか。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経済学部教員　菅原 宏太**

内閣府の国民生活に関する世論調査によると，自身の生活水準が世間一般から見て「中の中」であると答えた人の割合は調査が開始された半世紀前から55%前後で横ばいである。同じ調査における他の選択肢の推移と比べると，いかに多くの人たちが安定的に中流意識を抱いているかがうかがえる。

このような世の中において，対象図書が取り上げている障害者は完全なマイノリティーである。私たちはマイノリティーと出会った時，少なからぬ戸惑いを感じる。なぜなら中流意識に支配された教育しか受けてこなかったからである。本作の評者は自身の教職課程での体験と対象図書の内容がリンクしたことでその戸惑いが晴れた感動を，該当箇所の丁寧な描写で表現している。この経験を活かし障害者以外のマイノリティーとの出会いにも期待したい。また，「はじめに」と「おわりに」にも目を通し，これらのケースを取り上げた著者の意図とその批評までできていれば，なお良かった。

入賞者から一言

入賞とはたまげたなぁ……やったぜ。入賞を受けて，うれしく思います。

これからも中央図書館で色々な本と出会いながら，自らの感性と言葉を磨いていきたいです。図書館大好きです。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

経営学部　２年次生

新屋（しんや） 怜央（れお）

書 名 ： 『ゆたかな社会』

著 者 ： ガルブレイス著 ； 鈴木哲太郎訳

出版社・出版年 ： 岩波書店 ， 2006

「 ゆたかな社会 」

あなたは「ゆたかさとは何か。」と問われたとき，答えることができるだろうか。また，ゆたかな社会であれば人々は幸せといえるのだろうか。その答えを経済学の視点から模索した人物がジョン・ケネス・ガルブレイスである。彼はハーバード大学で経済学者として教鞭をとり，50作以上の書籍を世に送り出している。その中で最も有名な作品が本作『ゆたかな社会』（原著 The affluent society）である。本書は初版1958年から1998年に渡り四度も改訂を重ね，世界中で読み継がれてきた経済学における古典的名著である。

この作品の優れている点は，近代経済学の父と呼ばれるアダム・スミスの伝統的な思想，いわば経済学全体の基礎に一石を投じた事である。1776年にスミスが著した『国富論』では生産の増大に関する三つの磐石な理論を打ち立てた。それらを要約すると，分業を行うことで生産を大幅に増加させる事，国の豊かさは労働生産によって得られる消費財の蓄積である事，自由競争により生産と消費が過不足の無い状態へと導かれる事（見えざる手）である。つまり，スミスは自由放任主義といわれる状況下で生産の増大を基軸とすることで，ゆたかな社会が実現すると考えた。この理論は150年もの間，人々がゆたかな社会を構築する為の規範として存在し続けた。だが，1929年に起こった世界恐慌によって初めて生産を増大させることができない状況を迎え，生産中心の社会を転換せざるを得なかった。その時代に光明を見出したのがケインズの消費中心の社会であり，ガルブレイスはそれに加え独自の視点を織り交ぜて生産中心の社会を批判している。本書の中で彼は，「われわれは，ゆたかさとともに，その便益および文化から排除された人びとを安易に無視して平気でいる，という危険がある。」，「われわれの裕福さが大きいことのために，ますます危険度の高まる兵器生産の原資，すなわち，いっそう増大する大量破壊能力のための原資が生まれる，ということである。」といった現代の社会に対する忠告や，「広告やセールズマンにより，いわば合成され仕込まれて初めて欲望がはっきりする」といった消費社会の落とし穴について批判している。このような彼の批判はあまりに鋭く，古典派経済学の通念を次々と破壊していったことから，異端派経済学者とも呼ばれる程である。

だが，この作品の鋭さゆえに不十分な点も挙げられる。一つ目は，この本が改訂されている時期はアメリカと当時のソ連が冷戦関係であったにもかかわらず，社会主義社会のゆたかさについては十分に論じられていない事である。二つ目は，ガルブレイスがアメリカ政府に仕えていたという背景もあり，アメリカ型資本主義社会の批判一辺倒であったこと。言い換えれば，イギリスをはじめとしたヨーロッパ圏の資本主義に対しての記述が無く，

彼の「ゆたかな社会」論を立証する為の普遍性に欠ける事。最後に，彼は労働から満足を得ている人々を「新しい階級」と呼び，「その資格は圧倒的に教育である。」と結論付けている。しかし，戦後から急速に発展した開発経済学の観点では，「新しい階級」となる為には教育だけでなく，市場の整備の度合いや福祉，自然環境など様々な要因が複雑に作用し合っているという結果が裏付けられている。つまり，作中に述べられたガルブレイスの理論はもはや怒涛の勢いで変化していく社会に追いついていないのではないかという事である。

私が本書を通じて考えさせられた事は，「ゆたかさとは何か。」という問いの答えである。本文中でも述べられているように，先進国では，人々が自分達の社会の発展の為に物を生産し続け，広告やメディアを通じて消費という欲求を有効的に操るといったことが常態化している。そうした状況では，経済発展が一人歩きし，物質面でゆたかになったとしても精神面でゆたかとは言えず，むしろ乏しくなる一方だろう。それらを感じる理由は人それぞれだが，私の場合は，友人が発展途上国とされるウガンダで撮った子供達の写真が，その状況を証明してくれた。その写真の中で現地の子供達は満面の笑みで泥まみれになって遊んでいた。その写真から伝わってくる溢れんばかりの幸せは，先進国とされている日本の子供達の笑顔と比べても遜色ない。それどころか日本では，町中の至る所で液晶画面に磔にされているような子供達も散見され，私はその時，彼らが生ける屍のように思えた。そのような体験もあり，自分自身のゆたかさの定義が未だはっきりしない。

「ゆたかさとは何か。」についての議論はおそらく収束することはないだろう。その理由は，この問題の答えは一人ひとり違い，正解などないからである。大半の大人はこのような哲学的な問題に立ち向かうことは時間の無駄だという。だが，そのように思う人にこそ本書を読んで欲しい。なぜならば，この問いに対する答えを考えるプロセスそれ自体が「ゆたかさ」を象徴するものかもしれないのだから。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経済学部教員　菅原 宏太**

手元のデジタル大辞泉（小学館）によると，書評とは「書物について，その内容を紹介・批評した文章」とある。更に，批評とは「物事の是非・善悪・正邪などを指摘して，自分の評価を述べること」とある。つまり，対象図書の良い点ばかりを挙げただけでは，それは書評ではなく，テレビショッピングのキャッチトークや本屋のポップコピーにすぎない。私が審査した作品のほとんどはこの類であった。

本作の評者は，J.K.ガルブレイスの（一見読みやすそうには思えるが）難解な著述に挑み，単なる紹介や称賛にとどまることなく，不十分な点についての指摘も試みている。もちろん，専門家から見れば，それらの指摘の多くは表層的であり外在的であり，的を射ているとは言いがたい。しかしながら，評者が「書評」の様式を取ろうとしたことは何より評価されるべきである。ガルブレイスの他の著書や彼が批判した経済学者に触れ，ガルブレイスの思想・理論をより深く理解することで，的確な批評が可能となろう。

入賞者から一言

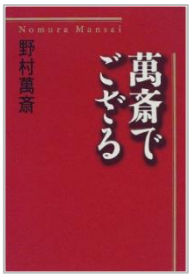
この度は，私の書評を書評大賞佳作に選出していただき，誠にありがとうございます。自身の所属するゼミナールの夏期課題として応募した図書館書評大賞ですが，このような機会がなければ，自分自身の「ゆたかさ」を再考する事もなく漫然とした学生生活を過ごす事となったかもしれません。もし，この書評に目を通していただき一人でもご自身の「ゆたかさ」について考えていただけたのであれば，書評の筆者としてこの上ない喜びです。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　３年次生

筒井（つつい） 茉衣（まい）



書 名 ： 『萬斎でござる』

著 者 ： 野村萬斎

出版社・出版年 ： 朝日新聞社 ， 1999

「 萬斎でござる 」

生まれた時から職業が決まっているとしたら，どのように感じるだろうか。私は，自由が１つ奪われ，どことなく窮屈な感じがするのだが，人によって様々な考え方ができるだろう。日本の伝統芸能の世界には，そのような自由は，ほとんど存在しないと言われている。自らを「狂言サイボーグ」と称する，狂言師・野村萬斎は，少年時代，自らのやりたいことと，宿命ともいえる狂言との間で揺れていた。本書は彼が萬斎という名を襲名する前から現在までが，さまざまな視点から書かれ，人生と，その中での自分の在り方について考えさせられる１冊である。

人生とは一人ひとりに与えられた貴重な時間である。少年時代の野村萬斎は自らの置かれている環境を頭の隅では理解しながらも，林間学校や運動会などの学校行事を，狂言のため，満足に参加できないことを不本意に感じていたと言う。中・高生になると，ますます狂言との距離は遠のき，稽古にも積極的ではなくなった。そんな時，とある映画への出演話が舞い込む。あの黒澤明監督の『乱』だ。狂言とは違う型のない世界で，自らの体を使い，１つのものを生み出す難しさや楽しさを感じた萬斎は，同時に，型の生み出す芸術の魅力を再認識する。これが狂言師，野村萬斎の誕生である。萬斎が狂言師になるということは，偶然であり，必然だったのかもしれない。ある程度レールが引かれていたとは言え，彼は狂言とともに生きることを選んだ。最終的に自分の進む道を決定するのは間違いなく自分自身である。人生という個人の特別な時間を，何に費やし，そこから何を生み出すのか。その答えは自分自身で見つける他にない。萬斎はその後，狂言の道を一心不乱に突き進み，シェークスピアの作品を題材にした狂言を書き上げたり，クラシック音楽のボレロと『三番叟』を融合させた『ＭＡＮＳＡＩボレロ』を生み出した。それらの作品は日本国内だけでなく世界各国からも高い評価を得て，野村萬斎の名前と共に日本を代表する伝統芸能「狂言」の魅力も広めている。

犬，猫，殿様からゴジラまで，野村萬斎が演じるものはジャンルこそ違うが，すべてに共通して狂言の技術が活きている。手の上げ方，座り方，洗練された型によって生み出される風格は唯一無二のものである。人はみな，自分にしかできないものを持っているのではないだろうか。近年自分に絶対の自信がある人というのはそう見かけない。だが，人は必ず何かにおいて唯一無二の存在になれるのではないか。その形が見えてきたときこそ，人が自らの存在に自信を持ちはじめる時に違いない。「狂言」という１つの大きなレールか

ら，さまざまなジャンルのものを生み出した彼のように，私であれば「学生」という大きなレールから私でしか生み出せないものが存在するのではないか，と考える。彼は，本書の中で，自身の人生について，ある時は狂言師・野村萬斎として，そしてまたある時には，狂言師以外の視点から述べている。自分について，多彩な視点から分析することの大切さや面白さをこの本は教えてくれる。

変わりゆく時代の中で，伝統芸能の世界はどんどん遠くなってきているように感じるが，彼の舞台には若い世代の観客も多くみられる。日々試行錯誤しながら「狂言」という大きなベースは変えず時代のニーズに合わせた新しい狂言を彼は生みだしている。この本の中では，野村萬斎の人生観の他に，狂言の魅力についても多く言及されている。１度は狂言から離れ，狂言と共に生きる決意をした萬斎の語る狂言の魅力とは。歴史の長いものにはそれなりの魅力がある，とでも言うように，狂言への興味が掻き立てられる作品である。知識の有無は関係なく，この本で語られる「狂言」から必ず受け取ることのできる魅力が確かに存在するのである。タイトルの『萬斎でござる』というのは，狂言の曲のほとんどに出てくる，最初のセリフ「このあたりの者でござる」から生み出されたのであろう。「いま，このときにここにいる人です」という漠然とした存在の太郎冠者。本書の中では，「時間を超え，場所も超越して」，「現代と舞台との間の扉を開ける，奥の深いせりふ」として１番最後に語られている。だからこそ，そこから生み出される笑いは今の時代でも必ず共感できるものだといえる。『萬斎でござる』は「野村萬斎」という漠然とした存在の中で，唯一無二の芸術を生み出し，さらに進化し続ける彼の人生観や過程が読者に勇気を与える作品である。

この作品は，自分に自信がない人はもちろん，単純に日本の伝統に興味がある人，演劇が好きな人，野村萬斎を知っている人も，知らない人にも，必ずひとりひとり違ったメッセージが伝わる作品である。「自分」とは何か。その答えを知りたい人に，特に読んでほしい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　外国語学部教員　青木 正博**

『萬斎でござる』の著者野村萬斎は，狂言の伝統をしっかりと守りながら，映画やテレビで出演して狂言の普及に努めている。この本は萬斎が生い立ちから現在までの自分の成長過程を語ることにより，自分の活動を通じて自分に興味を持った人たちに狂言に近づいてもらうために書いた本である。

本書を「人生と，その中での自分の在り方について考えさせられる１冊」として読んでいる点がこの書評の特徴であり，優れた点である。評者は萬斎が小学校時代から葛藤しながら結局狂言師の道を選ぶことになった過程を述べ，それを人生における自分の道の選択の問題に結びつけて考えている。また，萬斎が狂言の世界で唯一無二の存在であるように，自分にも「“学生”という大きなレールから私でしか生み出せないものが存在するのではないか」，と考えている。本書に書かれていない萬斎に関する知識も使って書評していることもよい点である。

入賞者から一言

入賞のメールが届いて，とても驚きましたが嬉しかったです。狂言だけでなく，現代劇やTVコマーシャル，ドラマなど多彩な方面で活躍されている狂言師野村萬斎さんの生きざまを皆さんに知ってもらいたくてこの本を選びました。私の書評をよんで，伝統芸能や野村萬斎さんに興味をもつかたが増えたらいいなと思います。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

外国語学部　２年次生

西川（にしかわ） 七海（ななみ）

書 名 ： 『幸福な食卓』

著 者 ： 瀬尾まいこ

出版社・出版年 ： 講談社 ， 2004

「 幸福な食卓からみる、家族の形 」

クスリと笑えて涙が伝う。父とは，母とは，兄弟とは……。身近すぎて見失いかけている大切なものを思い出させてくれる，少し変わった家族の物語。「父さんは今日で父さんを辞めようと思う」。瀬尾まいこの代表作『幸福な食卓』は主人公である中原佐和子の父親の意味深なセリフから始まる。家族が歪みつつある中，切れそうで切れないその絆の重みがじわりじわり胸に迫ってくる小説である。2004年に刊行され，翌年吉川英治文学新人賞を受賞した。

父親の役割を放棄し仕事を辞めた父と，アパートで一人暮らしをしつつ家事をしに家を訪れる母。天才気質の兄は苦悩を知らぬが故，大学へは行かずに農業の道を選ぶ。それぞれが何かを抱えている。母が家を出たのは，父の自殺未遂が原因だった。しっかり者の佐和子は梅雨が来るたびにその日のことを思い出す。そんな佐和子を突然，悲劇が襲う。心の拠り所だった大切な恋人が亡くなってしまったのだ。喪失と再生，苦悩と希望――。様々な出来事や感情の中で，彼らは家族とは何かを見出していく。

家族の形とは何か。私の家族は世間の一般的な家族とは少し違う。私は父と父方の祖母と暮らしている。母は私の妹と母方の祖父母と暮らしている。戸籍上，私は母や妹と別の家族ということになる。離婚がさほど珍しくはない今の世の中において，その状況に慣れてしまえば悲観することもない。だが，やはり周囲とは少し違う家族の形に戸惑うことはしばしばあった。初対面の人は大抵，私が母親と一緒に暮らしているという前提で話をしてくる。複雑な心情で少し暗い気持ちになった。そんな時，手に取ったのがこの小説だった。「家族は作るのは大変だけど，その分，めったになくならないからさ。あんたが努力しなくたって，そう簡単に切れたりしないじゃん。だから，安心して甘えたらいいと思う。だけど，大事だってことは知っておかないとやばいって思う」。恋人を失った佐和子はすべてに対して投げやりになった。家族にも冷たい態度を取り続けた。そんな主人公に，苦手だった兄の恋人が投げかけたのがこのセリフである。家族の繋がりは，簡単には切れない。そう自分に言われているようだった。

形なんて関係ない。住む場所も関係ない。家族は戸籍ではない。家族は家族である。傷つけたり傷つけられたりしながらも，糸は切れずに繋がっている。私たちは気づかないと

ころで，いつだってその糸に支えられているのだ。そんな有難味に気づき，日々を送っている人が一体どれくらいいるのだろうか。この作品は忘れかけていた大切なことを思い起こさせてくれる。「父さんさ，やっぱりちゃんと生きなくちゃって思った。そして，父さんにとって，ちゃんと生きるってことは父さんとして生きることだって思った」。どんな形であろうと家族という繋がりの中で，人はそれぞれ自分の役割なしには生きられないのだろう。

主人公は愛されている，家族や周りの人から。そう強く感じた。いじめに遭った時，助けてくれたのは恋人だった。その恋人を亡くした時，彼女を救ったのは家族や恋人の家族，兄の恋人だった。人は一人では生きていけない。そのようなこともまた，この作品は教えてくれた。一人で前を向けない時，誰かが寄り添い，言葉をかけてくれるから，再び前を向いて歩いていけるのだ。

「すごいだろ？　気付かないところで中原っていろいろ守られてるってこと」。佐和子がまだ恋人と出会う前に，気になっていた男の子の言葉だ。著者が言いたかったことがきっとここにある。その証拠として，このセリフが出てきたのは作品の前半なのに，後半でもこのセリフを思い起こしてしまう描写があるからだ。これは佐和子だけに向けられた言葉ではなく，私たち読者にも向けられたものだろう。人とはそういうものなのだと，瀬尾まいこさんがこの男の子を通して私たちに呼びかけている。

後ろ向きになった時，孤独を感じた時，辛いことがあった時。この作品を読めば，支えてくれている人の存在に気づくことができる。自分は一人ではないと分かる。そして，その中心が家族であることも。物心がついたその時から，無償の愛で支え，助けてくれるのは家族なのだ。当たり前だからこそ見えにくい。心が冷たくなったり，暗くなったりしたら，ぜひ読んでいただきたい。じんわりとした温かさを感じることができるはずだ。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法務研究科教員　渡邉　泰彦**

書評では，主人公を包み込みこんでいる世界を，自分の育ってきた状況とつながる点から，より具体的に伝えようとする思いが出ている。原作に描かれた主人公佐和子をめぐる家族は，主人公の父の自殺未遂後から始まり，恋人の事故死を最後に迎えるという重たいテーマすらとけ込んでしまう非現実性をもった，何かしらつかみ所のない家族である。そのような浮遊感のある物語を，評者は，自らの経験とのつながりを見つけ出し，家族への思いを通して，読者に伝えようとしている。評者の考える家族のあり方を示しながらも，自分の経験に作品を強引に合わせていないことは評価できる。その意味では，作品の選択がうまくはまり，その世界観を読者として紹介することができている書評ともいえる。さらに，作品が持つ現実からの独特の距離感を表現できれば，この小説の特徴をよりよく伝えることができる書評となっただろう。

入賞者から一言

賞をいただき，本当に嬉しく思います。それと同時に，書評大賞のことを勧めて下さった先生にも感謝いたします。また私がこのような文章を書けるようになったのは，授業で切磋琢磨し文章を書いていた，好敵手のような存在のメディア・コミュニケーション専攻のメンバーのおかげでもあると感じています。これからもその中で邁進していきたいです。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞　アンケートと統計

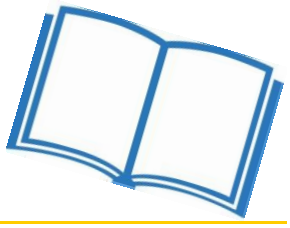
アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1）なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ゼミ等の課題・教員からの推薦。
- 昨年も応募し，楽しくて，また達成感も感じられたので，今年も応募しました。
- 自分の求める物事に対する新しい角度からの見方を，この書評大賞を通して試してみようと思ったため。
- 自分が読んだ本の面白さをより多くの人に知ってもらい，共感してほしいから。
- 今まで学んできた文章を書く力をこの書評大賞で試してみたいと思ったから。

Q2）書評の対象図書をどのようにして選びましたか。（最もあてはまるもの１つ）

- 興味のある分野だから　21 人
- 先生からの推薦・指示　20 人
- 好きな作家だから　16 人
- 図書館で見つけたから　14 人
- 話題の本だから　2 人
- その他　4 人



Q3）次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」（50 人）（理由）

- 今回の書評大賞の応募のために読んだ本から多くのことを学び，本の良さをもっと多くの人に知ってもらいたいと考えたため。
- また一年経った自分の力試しとして応募したいです。
- 本をただ読む事と批判することの難易度の違いを知ることができた。よい振り返りの材料となった。
- 昨年度も応募し，成果が出たため。

「いいえ。」（25 人）（理由）

- 1,600 字は長いから。
- 恐らく卒業しているので。
- 書評に応募する原稿を作る時間で，読んだことがない本 1 冊は読めるので，書評に応募する原稿を作る時間より，読んだことがない本 1 冊を読む時間の価値のほうが，自分にとっては高いと判断したから。

Q4）執筆してみての感想や，提出方法など，お気づきの点を自由にご記入ください。

- 普通の読書感想文とは違って，自分が良かったと思う点だけでなく良くないと感じた点についても述べる事は今まであまり機会がなかったので，新鮮で楽しかった。
- 読んだ本から多くのことを学べたとともにもっと多くの人に本を読むことの大切さ，面白さを伝えるべきだと感じました。
- 1,600～2,000 字と比較的少ない文章で一冊の本の書評を書くことは難しかった。もう少し，分量を増やしていただければ本の内容を深く紹介できると感じた。
- 少しパソコンは不慣れだったこともあり，ワード指定様式での提出に手間取った。
- 提出方法の箇所で「版冊次等」が良く分かりませんでした。

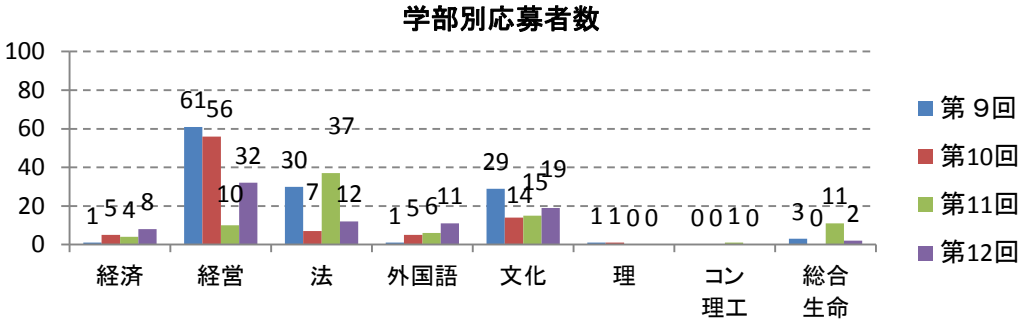
Q5）毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

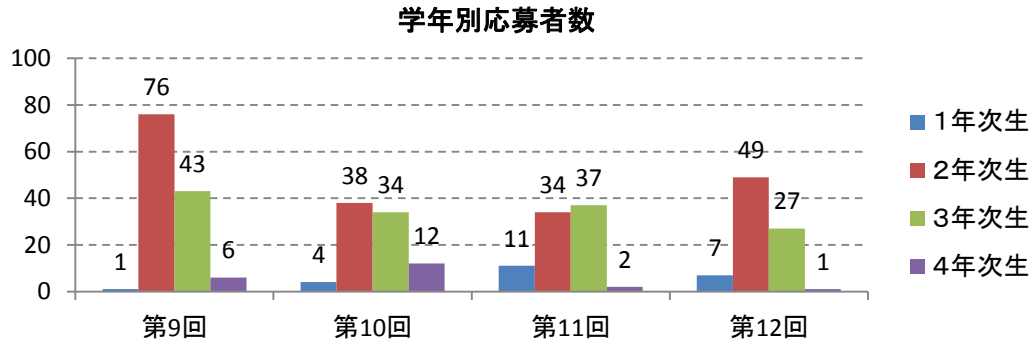
- 浅田次郎先生の講演会に参加させてもらったが，とても良かった。
- どのように自分の考えを文章にして構築していくか，そのような事を詳しく教えて下さるような講師を希望します。
- 講演日数を複数にしてほしい。

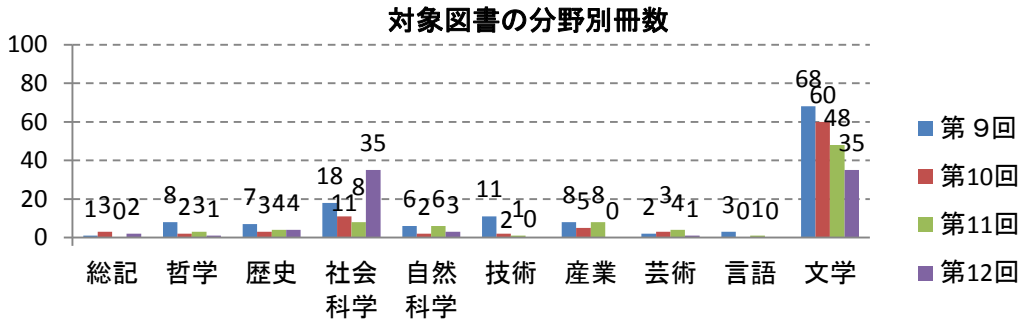
－ 希望する講演会講師（敬称略・五十音順）－

桜庭一樹・東浩紀

統計はこちらです。







今回の応募者数は84名で前回と同数となりました。学部別応募者数は経営学部・文化学部・法学部の順となり，経営学部が大幅に増加した一方で総合生命科学部が減少し，第10回以前の傾向に近くなりました。全体的に文系学部学生からの応募が多く，理系学部学生からの応募が少ない傾向は続いていますが，読解力や表現力は文系・理系問わず必要ですので，積極的にチャレンジしてください。

学年別応募者数は，例年通り２・３年次生が多い傾向で，こちらも第10回以前の傾向と似ていますが，１年次生からは７名の応募がありました。２回・３回と続けて応募することによって文章力を向上させている学生も数多くいます。

対象図書の分野別冊数では，文学と社会科学に関する資料の選択が多い一方，技術・産業・言語に関する資料の選択が０となりました。教員からの推薦がきっかけで応募された方が多い今回の書評大賞を反映しているように思われますが，対象となる本は「図書館の蔵書」全体です。これまで手に取ることが少なかった本でチャレンジするなど，多様な分野からの応募作品をお待ちしています。

第 12 回 京都産業大学図書館書評大賞 概要

目的

(1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け，読書活動が推進され，結果として図書館利用を促進する。

(2) 興味ある著作を読みこなし，内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は，図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力，文章表現能力を向上させ，レポート・論文作成能力，情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領（抜粋）

1. 応募資格　京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
   (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
   (2) 文字数：1篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。応募原稿様式は図書館 Web サイトから入手(マイクロソフト社 Word ファイル)。
   (3) 応募作品は本人のオリジナルであり，かつ未発表であること(盗用厳禁)。
   (4) その他：1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

84 名 84 篇

実施日程

応募期間：平成28年７月１日（金）～ ９月５日（月）
入選発表：平成28年12月１日（木）
表 彰 式：平成28年12月21日（水）

選考委員より ひとこと

最近は自分の専門の本や自分の趣味の本以外はほとんど読みませんが，講評を書くに当たって知らない分野の本を読み，とても新鮮に感じました。皆さんも書評で取り上げられた本を読み自分の世界を広げてください。（青木）

限られた字数の中で，対象図書の内容を要約し自身の批評を加えるという能力は，直近では就職活動の場面で，また就職して以降においても，必ず皆さんの役に立つことでしょう。今回の入賞を励みにして更にその能力に磨きをかけてください。（菅原）

質の高い書評が多かった印象です。欲を言えば，もっと批判精神溢れる書評を読みたかったです。大人が若者にこぞって「空気を読む」事を強制する時代に，それが難しい事は充分承知ですが，その強制の異様さに気付いた若者には注意して欲しい事柄です。（高谷）

情報社会が進み書物が徐々に読まれなくなってきている昨今，書評を読むことで，その本の概要が読み取れ，内容がイメージできる，また読者にその本を手に取って読んでみたいという気持ちを抱かせるような書評を今後も期待しています。（竹内）

ジャンル，出版年など本の種類は様々ですが，よい書評に共通するのは，その本が好きで紹介したいという気持ちでした。新聞や雑誌に掲載された良い書評を読んで，多くの本を探し出し，紹介してください。（渡邉）

豊かな語彙・表現力に読書量や読みの深さを感じました。図書館には様々なジャンルの本がたくさんあります。きっかけは何でもよいので，ぜひ本を手に取り，心の栄養を蓄えてください。（今井）

文章を書くのがうまい友人がいる。どうしてこんなにわかりやすく書けるのかと聞くと，小学生のときから本は好きで読んでいたと言う。読書量と文章力は比例するのだろうか。入賞者のみなさんにも聞いてみたい。（近江）

感想文やレポートの域を越えないと思われる作品が目立ちました。書評とは，その文章を読んだ「不特定多数の人」に本の魅力を訴えるものです。「みんなに自分の書評を読んでもらう」ことを想像しながら作成してください。（島田）

なぜ読書するかによって，読むジャンルはずいぶん違います。自分探しの旅，冒険小説，推理小説，私小説，ビジネス書，もちろん専門書も……。いずれを選ぶにしても，新しい発見があり，それとは反対に懐かしさを感じることがあります。読書をして，ぜひ次回ご応募ください。（真部）

今回の応募作品からは熱意の違いを感じました。書評の対象とした資料への熱意，紹介し批評しようとする熱意が，結果的に読んで面白い作品に至ったのではないかと思います。今後も熱意ある書評作品をお待ちしています。（山本）